

(二〇一一年度)

## 5 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は18ページ、三問である。)

### 受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、携帯電話・PHSの電源は切ること。
- 三、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 四、監督から試験開始の合図があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっているかどうか確かめること。
- 五、解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 七、マークをするとき、枠からはみ出したり、枠のなかに白い部分を残したり、文字や番号、枠などに○や×をつけたりしてはならない。
- 八、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 九、解答用紙を折り曲げたり、破つたりしてはならない。採点が不可能になる。
- 十、試験時間中に退場してはならない。
- 十一、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十二、問題冊子は必ず持ち帰ること。

以下は、哲学者坂部恵が萩原朔太郎をどのようにとらえていたかについて論じた文章である。これを読んで、後の問に答えよ。

「日本のモデルニテ」のなかで、坂部は朔太郎がランボーや藤村のような早熟の詩人ではなく、むしろ晩熟の詩人であったことを指摘し、そのことが「彼の哲学的な、ないしは端的にいつて哲学者・思索家としての資質と深く関係する」と述べている。たしかに、朔太郎は中学や高校で落第や退学を繰り返して挫折を味わい、西洋趣味に耽溺<sup>たんてき</sup>していた彼が、初めて抒情詩を『朱<sup>ホア</sup>戀』に発表したのは二八歳のときであった。その挫折の時代にニーチェやドストエフスキーを耽読<sup>たんてき</sup>したことが、「詩人がおのれのうちに批評家を内蔵している」と評されるたぐい稀な人格を形作つたのである。そのことを日本のモデルニテのあり方と関わらせながら、坂部は次のように論じている。

ひろい意味での文学の営みに批評の必須であるゆえんは、西洋ではボードレルこのかた、(あるいはもつとさかのぼつていえばおそらくカントこのかた)、自明なことと見なされていることですが、日本ではどうか。早い話、朔太郎がほとんどもっぱら抒情詩人と見られて、批評家、哲学者・思索者の面が忘れられがちであることは、まさに日本でのモデルニテの移入がまだ充分になされていないことのしるしなのではないでしょうか。(中略)彼は、近代日本の哲学史・思想史に当然しかるべき頁<sup>ページ</sup>が割かれてよいひとである、とわたくしは考えます。

「モデルニテ」という概念について、坂部はそこに不易と流行の両側面を見てとるボードレルの定義を引き合いに出しながら、「いずれにせよ、啓蒙主義流の進歩史観が破産するところから、モデルニテがはじまったことはたしか」であると述べている。それからすれば、<sup>1</sup>「モダン」というカタカナ語に象徴されるわが国のモデルニテに対する理解は<sup>2</sup>いまだ一面的なものにとどまっております、その射程を十全には捉え得ていないと言ふべきであろう。そのためには永遠と時間、詩と批評を一体のものとして感受する眼差しが必要だからである。

近代日本の詩人のなかで、そのような眼差しをもちえたのは、おそらく思想詩人としての朔太郎をもって嚆矢<sup>アキハ</sup>とする。そこ

にこそ、坂部が朔太郎を「哲学者」として遇する理由が存するのである。ただし、朔太郎はそれを抒情詩とアフォリズムというジャンルを異にした二つの領域で実現せざるをえなかった。彼は最初のアフォリズム集である『新しき欲情(情調哲学)』の「概説」において、タイトルに「情調哲学」という言葉を選んだ理由を「哲学といふ言葉の中に響く、理屈ばつた感じが少し厭やであるが、それでもあの『論文』や『評論』や『随筆』や『感想』やに比して、遙かにそれは私の気分に近い」と述懐している。つまり、既成の文学の器には収まらない表現意欲(気分)を彼が抱いており、それに相応しい表現形式を模索して「哲学」という言葉に行き着いたということであろう。その意欲は、「詩人としての私」は、既に幾篇かの抒情詩によつて公表された。『思想家としての私』は、この書物によつて始めて世に出るのである」という思想家としての自負となつて現われている。この詩人と思想家という朔太郎の二面性は、第三アフォリズム集『絶望の逃走』の「自序」において、「夜」と「昼」との対比を通じて明瞭に語られている。

抒情詩とアフォリズムとは、私の詩精神の両面であつた。二者の形態は異なるけれども、共にひとしく私にとつては、同じ詩情の生活する表現だつた。つまり後者のアフォリズムは、私にとつての「思想詩」であり、他の「抒情詩」と相對して、私の詩人生活を生成して居た。(中略)それ故に詩人の一面は、常に必ず哲人の風貌を具へて居る。夜に於ての抒情詩人が、昼に於ての思想詩人を兼ねることは、世界を通じて共通であり、詩人とエッセイスト、詩人と文明批判家の名は、常に同義字として考へられてる。しかもこれは避けがたい運命であり、詩人にとつて必然の悲劇的回歸である。詩人は彼の名譽のために「文化の指導者」と呼ばれるのでなく、逆にその呪はれた宿命のために呼ばれるのである。

朔太郎は文明開化の波に洗われた近代日本という時代の狭間において、詩人に課せられた「悲劇的回歸」ないしは「呪はれた宿命」を引き受けざるをえなかったのである。この「自序」をめぐつて、坂部はそれを「この悲哀と批評の意識は、間違いなくモデルニテ、モデルネのもので」と特徴づけ、そのモデルニテのありようを「朔太郎のいう抒情詩の『夜』の世界は、おそろくどこかで幽明の境に位置する永遠なものに通い(あるいはあこがれ)、他方『いまいまして悲しい』思想詩人の『昼』の世界は、そのつどの一時的なものが、『夜』の記憶を帯びた批評的魂に開示する時代の相貌にはかならないでしょう」と敷衍している。先に

言及した、モデルニテを特徴づける永遠と時間、詩と批評の両義性と相克を、坂部は朔太郎のなかに見たのである。

それでは、朔太郎の目に映じた「時代の相貌」とはどのようなものであったのか。第二アフォリズム集『虚妄の正義』の「緒言」には「今日のやうな時代！我々の伝統は滅びようとし、外来の精神はまだ根を持たない。今日のやうな時代に於て、我々の馬鹿正直な日本人は、何を考へたら好いのだらう」という言葉が見える。ここに表白されている時代<sup>4</sup>への違和感と根無し草の感覚は、夏目漱石が「現代日本の開化」において「かういふ開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念を懐かなければなりません」と論じたときの「空虚の感」や「不満と不安の念」と軌を一にするものと言ってよい。だが、朔太郎はこうした時代状況のただ中で、日本語による口語自由詩の文体を確立するために精神を傾け、格闘し続けた詩人でもあった。その格闘のありさまを保田与重郎は『四季』の「萩原朔太郎追悼号」に寄せた一文において「その様相は、近代と文明開化の渦中で行はれ、それこそ文化上<sup>5</sup>の白兵戦とも云ふべきものであった」と形容している。だとすれば、先の「緒言」に掲げられた次のような文章は、その白兵戦の戦場で挙げられた悲痛な雄叫びとも言うべきものであろう。

一方で詩人たちは、本来韻律要素のない日本の国語で、無謀にも欧州風の抒情詩や叙事詩やを真似ようとして、結局自ら詩を否定するに至つた迄<sup>4</sup>、帳尻りの合はない総決算に到達して来た。同じやうに散文家等が、今日小説の出發すべき、最初の形式問題について議論してゐる。そもそも彼等は、西洋近代思潮の産物たる自然主義や浪漫主義やを、過去の日本の伝統した古い国語——しかも日常会話の国語——によつて、小説の上<sup>6</sup>に表現しようと思志した日から、最初のジレンマに陥ちたのである。国語とその文法とは、必然に思想の内容を決定する。江戸時代からの伝統した日本語脈で、西洋近代の文学を書くかうとしたほど、誤つた出発点がどこにあるか。

朔太郎自身が、近代日本に口語自由詩という形で「無謀にも欧州風の抒情詩」をもたらした最初の詩人であったとすれば、これはまさに天に向かつて唾<sup>7</sup>するやうな文章であるが、彼がそのジレンマに終始自覚的であつたことは注目されてよい。そして、「国語とその文法とは、必然に思想の内容を決定する」のだとすれば、西田幾多郎や九鬼周造や和辻哲郎らが、日本語による哲学の文体を確立しようとする苦闘を重ねていたとき、彼らは朔太郎と同じ生みの苦しみを味わっていたのである。

〔注〕 モデルニテ：フランス語 modernité。現代性。

『朱戀』：北原白秋が主宰した雑誌。

アフォリズム：文学形式の

一つで、思考や観察の結果を簡潔かつ辛辣、諧謔的に述べたもの。警句、箴言、金言。 伝統した：受けつぎ伝わった。

問一 傍線部1のように筆者が述べるのはなぜか。次の中からその理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a モデルニテという概念を西洋から入ってきた新しさという水準でのみ理解し、それが内包する常に変わらぬ部分への眼差しを見落としているから。

b 一人の文学者が詩作と評論活動の両者を行うことに対し、近代日本の哲学史・思想史上、いまだ懐疑的な見方が支配しているから。

c 西洋趣味への耽溺が、啓蒙主義流の進歩史観の破産という観点から見て、日本のモデルニテにとって避けて通れない過程であることが理解されていないから。

d 萩原朔太郎が早熟ではなく、晩熟の詩人であったことの意味を、日本思想史の観点からもう一度問い直す必要が痛感されるから。

問二 波線部ア・イの意味としてもっとも適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア a 稀な例とする b 確実となる c 途絶えてしまう d 最初とする

イ a 神秘的な境遇 b 昼夜を分かち区切り c かすかに明るい場所 d あの世とこの世との境界

問三 傍線部2はどのようなことを意味するか。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

- a 抒情詩とアフォリズムは、その本質は異なるが、詩人生活を生成する場という意味で同じ価値を持っていた。
- b 抒情詩とアフォリズムは、詩人にとって詩の味わいを深めるための必然的な表現であった。
- c 抒情詩とアフォリズムは、詩に表したいという一つの欲求が生き生きと活動する二つの場であった。
- d 抒情詩とアフォリズムは、文学者がその活動に当たって必要とする帰るべき場所であった。

問四 傍線部3について、以下のA・Bに答えよ。

- A ここでいう「両義性」とは具体的にはどのようなことか。次の中から適切なものを二つ選べ。
  - a 既成の文学の枠には収まらない、詩人であると同時に思想家でもありたいという表現欲求。
  - b 永遠なるものとながり、通いあいながら、時代を批評する眼差しを持ち続けるあり方。
  - c 抒情詩の詩作の中にも、時代に即した警句を忍び込ませるという実践。
  - d 日本の伝統と外来の新しい思想が、ともに調和しないままに併存する時代背景。
  - e 文化の指導者であろうとしても、呪われた宿命を背負わざるをえないような境遇。

B 「相克」とはどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 永遠と時間、詩と批評の両義性という悲劇的回帰を宿命として受け入れながらも、実際の文学活動の中では、両者を生かす道がまだ見つからず、苦闘しているような状況。

b 永遠と時間、詩と批評という両義性をそのまま引き受けた結果、近代日本という時代の狭間で創作活動を切り開いていくにあたり、その両者が常にせめぎ合っているような状況。

c 永遠と時間、詩と批評の両義性という悲劇的回帰を、進んで創作の原動力に昇華させ、両者の調和を最終的に目指している状況。

d 永遠と時間、詩と批評という両義性の狭間で、この種の両義性を否定しつつ、超越した現代性を獲得しようと格闘し続けている状況。

問五 傍線部4における「違和感」や「感覚」はなぜ生じるのか。次の中からその理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a 西洋の文学や思想が日本文化の中に否応なく定着しはじめている現状においても、それは結局のところ外来の文学・思想であり、日本人が無から作り出したものではないから。

b 西洋的な価値観を本来は否定したいはずなのに、それを受け入れたような顔付きを無理にしている日本人の姿に共感することができないから。

c 明治以降の急激な近代化の中で、西洋の思想が日本人の精神の中に根付くことも無いままに、伝統的な文化は廃れてゆき、後にぼっかりと穴が開いたような状況となっているから。

d 文明開化の波に洗われ、近代化という名の下に西洋化が進行したが、日本人にとって必要なことは、やはり西洋の影響をはね返し、日本固有の文化を守るところにあると考えられるから。

問六 傍線部5はここではどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 決着がつくまでに時間のかかる、大局を見ながら地道に行わなければならない文化的闘争。
- b 本来なら勝ち目が無いのに、そのような時代状況の中であえて挑まざるをえない日本文化を賭けた戦い。
- c 直接白刃で切り合うような、日本文化と西洋文化との間の、気を抜けばすぐに負けてしまうようなぶつかり合い。
- d 日本の近代化がまだ不十分な中、丸腰に近い準備で臨まなければならない西洋とのせめぎ合い。

問七 傍線部6の「ジレンマ」とはどのようなことを意味するか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 詩人が韻律要素のない日本語で西洋の詩を真似しようとしたのと同様に、小説においても日常会話の日本語を用いて、西洋の小説の真似をしようと無謀にも試みたこと。
- b 西洋の言語を用いて文学活動を行うことができない以上、西洋の近代思潮を文学のうえで実現することは不可能であると悟ること。
- c 江戸時代までの旧態依然とした文学形式を捨てず、そのまま用いながら、自然主義や浪漫主義の文学に取り組もうとすること。
- d 西洋から輸入した文芸思潮を日本語の小説で実現しようとしても、それを十分表現するに足る散文のスタイルが日本語そのものに備わっていなかったということ。



問八 傍線部7のように筆者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを、次の中から一つ選べ。

a 日本の大和ことばは抽象的な思考に向かないということを知らながら、それを用いた詩作をあえて続けていったのが朔太郎のあり方だったと言えるから。

b 日本語の文法に従っているのは西洋の思想を表現しえないという主張は、口語自由詩という形で西洋の抒情詩を採り入れようとした朔太郎にそのまま困難がふりかかってくることを意味するから。

c せっかく日本語による詩作に西洋の詩のスタイルを採り入れることができた幸運を、朔太郎の文章は根底から否定するような態度を取っているから。

d 日本語の近代文体をめぐるジレンマについて朔太郎は自覚的であったが、それが哲学の世界においても共有される広がりを持つことまでは、彼が言及していないから。

問九 次の文章の中から、筆者が考える「坂部恵の萩原朔太郎観」と合致するものを二つ選べ。

a 朔太郎の哲学者としての資質は、彼が晩熟の詩人であったことの中で育まれ、そのことをもって永遠と時間、詩と批評を一体のものとして感受する眼差しを持ちうるようになった。

b 西洋における定義とは異なる日本独自のモデルニテを朔太郎の背負った「呪はれた宿命」の中に見出している。

c 朔太郎は日本語の改良という過程を踏まずに、その困難を知りつつ、西洋の文学思潮をそのまま日本語で表現した。

d 日本語を用いながら西洋の影響を無視しえない近代文学を切り開いていったところに、西田幾多郎、九鬼周造、和辻哲郎ら哲学者と同様の苦労を重ね合せている。

e 口語自由詩という形式で西洋的な抒情詩を模索する際には、哲学者の苦闘の場合と同様に、日本語の本質を切り捨てなければならぬ悲劇を背負わざるをえなかった。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

近比、ある僧の家に、大きな橋の木ありけり。実の多くなるのみにあらず、その味も心1ことなりければ、主の僧また、たぐひなき物になむ思へりける。

かの家の隣りに、年高き尼ひとり住みけり。重病をうけて、床にふして、日來物も食はず、湯水なんども、はかばかしく吞み入れぬほどになれりけるが、この橋を見て、「かれを食はばや」と云ひければ、即ち、隣りへ人をやりて、「かくなむ」と云はせたりけれど、情けなくかたく惜しみて、一つもおこせず。この病人の云はく、「いとやすからず。心うき事かな。病ひすで5に責めて、命、今日・明日にあり。たとひよく喰ふとも、二つ三つにや過ぐべき。それほどの物を惜しみて、我が願ひを叶はせぬは、口惜しきわざなり。我、極樂に生まれん事を願ひつれど、今にいたりては、かの橋をはみつくす虫とならんと。そのいきどほりを遂げずは、浄土に生まるる事を得じ」と云ひて死ぬ。

隣りの僧、この事を知らずして日來すぎける程に、この橋の落ちたるをとりて喰はんとて、皮をむきて見るに、橋の袋ごとに、白き虫の五六分ばかりなるあり。驚きて、「いづれもかかるなんめりや」と思ひて、見れば、そこらの橋、さながら同じやうになむありける。年を追ひてかくのみありければ、「何にかはせむ」とて、はてにはその木を切り捨ててげり。

願力と云ひながら、さしも多くの虫となりけん事は、いみじき不思議なり。かれ、悪事を思ふは、くだりさまの事なれば、叶ひやすくは侍るにこそ。

(『発心集』)

〔注〕 五六分：一センチメートルから二センチメートル

問一 傍線部1「心ことなりければ」とあるが、どのような意味か。次の中からも適切なものを一つ選べ。

- a 一つ一つが違った味だったので
- b 気が変になりそうな味だったので
- c 違う果物を想像させる味だったので
- d 格別においしかったので

問二 傍線部2「かくなむ」とあるが、どういうことか。次の中からも適切なものを一つ選べ。

- a 隣家に尼が住んでいること
- b 隣家の尼が重病であること
- c 重病の尼が飲食できなくなったこと
- d 隣家の橘を食べたいということ

問三 傍線部3「情けなくかたく惜しみて」とあるが、どういうことか。次の中からも適切なものを一つ選べ。

- a 橘をことのほか愛して、他をかえりみないこと
- b あきれてしまふほどに、橘を大切にしようとしないうこと
- c あさましいほどに独占欲が強く、けちであること
- d 尼の病気にはまったく関知せず、同情もしないこと

問四 傍線部4「いとやすからず」とあるが、どのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a どうしたらいいか困ってしまう
- b とても不安になる
- c 大変腹立たしい
- d すごくおもしろい

問五 傍線部5「病ひすでに責めて」とあるが、どのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 病気であることがはっきりわかって
- b 病気のせいですっかり弱っていて
- c 病気が原因が橋と判明して
- d 病気にも随分と慣れ親しんで

問六 傍線部6「そのいきどほりを遂げずは、浄土に生まるる事を得じ」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 生まれ変わって橘を食う虫になるまでは、極楽往生しないという誓願を立てたこと
- b 橘を食い尽くすまでは、決して極楽往生しないつもりだ、という誓願を立てたこと
- c 隣家の僧を罰するまでは、自分も極楽往生しないという誓願を立てたこと
- d 自分の心の動揺を鎮静させるまでは、極楽往生しないという誓願を立てたこと

問七 傍線部7「いづれもかかるなんめりや」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a どの虫もこんなに色は白いのか、と見とれてしまったこと
- b どの虫もこんなに小さいのか、とあきれてしまったこと
- c どの袋にも虫が付いていて、食べられないのかと困ったこと
- d どの橘にも尼ののろいがかかっているのかと恐ろしくなったこと

問八 傍線部8「年を追ひてかくのみありければ」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 年を追うごとに虫の数は次第に増えていったこと
- b 何年経っても虫の数が減ることはなかったこと
- c 何年も続けて橘の実が豊作になったこと
- d 年を追うごとに尼ののろい度が度を超していったこと

問九 傍線部9「何にかはせむ」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a どんなに橘が実っても虫がいては食べられないと観念したこと
- b どんなに虫が増えても橘の実すべては食べ尽くせないと判断したこと
- c このままでは虫がすべての橘を食べ尽くすであろうと予測したこと
- d 尼ののろいがやがて自分に襲いかかるであろうと危惧したこと

問十 傍線部10「悪事を思ふ」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 他人に嫌がらせをしたり、不幸にしたりする祈願であったこと
- b 無数の虫に転生するなどという奇抜な祈願であったこと
- c 人間としての罪業に深く関わる祈願であったこと
- d 積んだ功德より低劣なレベルの祈願であったこと

問十一 傍線部11「くだりさまの事なれば、叶ひやすくは待るにこそ」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 極楽往生を断念して、畜生に転生する祈願なので実現しやすかったこと
- b 他人を幸福にではなく、不幸に陥れる祈願なので実現しやすかったこと
- c 大きな望みではなく、小さな虫に転生する祈願なので実現しやすかったこと
- d 末法の世にふさわしい、低劣なレベルの祈願なので実現しやすかったこと

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、設問の関係で送り仮名を付していないところがある。

孔子曰、夫遇不遇者時也。賢不肖者材也。君子博学深謀、不遇時者多矣。由是觀之、不遇世者衆矣。何独丘也哉。夫芷蘭生於深林、非以無レ人而不芳。君子之学、非為通也。為窮而不困、憂而意不衰也、知禍福終始、而心不惑也。夫賢不肖者材也。為不為者也。遇不遇者時也。死生者也。今有其人、不遇其時、雖賢其能行乎。苟遇其時、何難之有。故君子博学深謀、修身端行、以俟其時。

(荀子『宥坐篇』)

〔注〕○丘—孔子の名。ここでは自称。 ○芷蘭—芷も蘭も、ともに香草。君子や美人にたとえることが多い。 ○為不為—為は「なす」の意。

問一 波線部 A B と同じ字義で用いているものはどれか。それぞれ次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- |   |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| A | a | 窮理 | b | 窮達 | c | 窮乏 | d | 窮年 |
| B | a | 端緒 | b | 端的 | c | 一端 | d | 端正 |

問二 傍線部 1 はどういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 世に認められないのは、私だけではない。
- b 世に認められるかどうかは、私のことだけで考えない。
- c 世に認められないなりに、私のような者はいない。
- d 世に認められなくても、私は私以外の何者でもない。

問三 傍線部 2 はどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 見てくれる人がいてはじめて、芳しい花の存在が知られるわけではない。
- b 見てくれる人が現れるかどうかで、花がその香りを変えることはない。
- c 見てくれる人がいないからといって、芳しい香りを漂わせないわけではない。
- d 人が見てくれることを求めて、芳しい香りを発するわけではない。



問四 傍線部3の「通」とはどういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 知識・技能に精通する。
- b 天下の事情に熟知する。
- c 深遠な道理に達する。
- d 地位や名誉を得る。

問五 傍線部4について、次の古言のうち当てはまるものはどれか。もっとも適切なものを一つ選べ。

- a 禍福は己よりこれを求めざる者無し。
- b 禍を転じて福と為す。
- c 禍福は糾<sup>あきな</sup>へる繩の如し。
- d 禍福は門無し。

問六 空欄部XYをうめるのにもっとも適切なものはどれか。それぞれ次の中から一つ選べ。

- a 学
- b 道
- c 人
- d 命
- e 徳
- f 運

問七 傍線部56はどういう意味か。それぞれ次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

5 a その能力が認められない。

b 行動を起こすことができない。

c 何の力も発揮できない。

d どこに行くこともできない。

6 a 人から非難されることがない。

b 災難に出くわすこともない。

c 栄達するのが容易になる。

d どんな仕事でも不可能でなくなる。



